

## 東海地方の徐福伝承

2015.1.21 前田 豊

名古屋熱田神社は、蓬莱の地と呼ばれていた。徐福集団が、富士山を目指して東遷する場合、途中で伊勢湾から熱田に回り、三河湾に入る。その地を拠点に、先進隊が遠州から駿河に向かったと考えることは、容易に可能である。

熱田の呼称“蓬莱山”は、興味あるところであるが、徐福のことは伝承されていない。

三河湾を囲む半島は、渥美半島で、海神伝承をもつ安曇族の拠点であったし、湾内の蒲郡には、徐福集団の鶴殿氏の拠点で、赤彦神社には、豊玉姫伝承がある。

小坂井の菟足神社には、徐福上陸伝承があった。

### 1. 東三河は徐福子孫の定着地

「徐福」東渡で、到着した地と言われる場所は、日本の各地にあるが、「本当に定着した地」は、決着していない。

「富士古文献」に記載される場所では、「徐福」が目指した地は「トヨアシハラミズホの国」であり、「ホウライ」と呼ばれていた。

愛知県の東三河は、古代「豊国」「ホの国」と呼ばれ、ホウライ（鳳来）という地名（町名）がある。鳳来寺山は、古代の火山で、数千メートルの高さをもつ巨大な「不二山」であったと言われる。東三河は、この不二山の南山麓に位置する。

そして、富士王宮と呼ばれたところが、豊橋市に3箇所（賀茂神社、浅間神社、梶本神社）確認された。つまり、東三河は、まぼろしの「富士王朝」と関係があるようだ。

鳳来寺山の少し南の「本宮山」の麓には、紀州「古座」から移り住んだ徐福の子孫が繁栄し、秦氏を名乗っていたとの伝承がある。そして、その子孫は全て、三河に居住していた、とのことである。

これらは富士古文献との符合を示しており、「牛久保密談記」という書に書かれ、伊勢神宮の書庫に保管されているという。

秦氏の名前は、豊川市に幡多郷などとして、残っているが、中国名であることを嫌って、日本名に変えたといわれる。

そのため、現在の三河の居住者に「秦の氏名」は少ないが、羽田氏などの姓の有力者が住まわれている。

### 2. 富士古文献の記す高天原は東三河か

富士古文献は、富士吉田市に住む宮下家が保管していることから宮下文書とか、東渡した秦の方士・徐福が編纂したという伝承から徐福文献と呼ばれている。宮下家は富士山北麓吉田に所在し、記録された文献の内容は、富士山南麓の不二高天原における、日本の超古代史の事が記載されているという。

しかし、該当する不二高天原の古代遺跡から、ここに古代王朝が存在したという根拠は見いだされていない。ただ、古代遺跡は富士火山の爆発と溶岩流によって埋もれてしまい、消滅してしまったとされている。

一方、富士山北麓には、富士古文献で述べられているような、大掛かりな湖沼、神都が存在するという遺跡の存在が感知されない。このことから、富士古文献自体が偽書であり、根も葉もない虚偽の古代史であるという意見もあり、アカデミズムの世界からは無視されているのが、実情である。

富士山北麓の現実を見るに、徐福に関連した確かな史跡はどれも乏しい。そこで、宮下文書の記述の信憑性が少ないといわれている。筆者は、徐福一行が列島に到着したことは事実だと思し、富士古文献も全くの偽書とは思われない。従って、富士古文献の内容、比定場所の解釈をやり直す必要があると感じていた。

富士古文献は徐福文献ともいわれ、徐福が蓬莱の国に渡来し、その栄光の歴史に感激し、木片や木の葉に古代だんべい文字で書かれた文書を、漢字で書き記したものともいわれている。(注、ちなみに、浜名湖を航行する古代船は、だんべい船と呼ばれていた。)

もし、徐福が実在の人物であったとすれば、徐福文献自身も歴史的事実性は極めて高く、その内容の信憑性もおおいにあると言うべきであろう。

富士古文献の内容は東三河の事跡と対応させることができる。新城市有海に丸山・飛塚というところがある。中室は有海のことのようだ。上の平遺跡や大龍寺が近くにある。白連滝に関係してか、豊川対岸に、滝の入という地名がある。尚、大室は三河一宮、庭野にその名称が残っている。小室は、鳳来寺山入り口・門谷に子守神社があるが、小室の訛りを感じさせる。鳳来寺の本尊は薬師如来である。農業、機織、養蚕については、開祖の神社、地名が残っている。

つまり、結論的には、富士古文献は、富士山北麓の史実を表しているのではなく、場所の設定が間違っている。というより、意図的すり替えが行われたと考えられる。

たぶんそれは、宮下文書に出てくる地名を共有する他の地域にあるはずである。つまり、それは、東海の3神山の地、東三河から奥三河の地という線があぶり出されてくる。

従って、富士古文献は、その地で、展開された日本の神々の真実の歴史が記された文献であると私は推定している。

### 3. 蓬莱とは鳳来のことかー山田久延彦氏の説

ところが、同じ説を約20年前に論じた人がいたことを記して置かねばなるまい。

富士古文献に述べられている「東海の蓬莱山」を、「富士山ではなく、愛知県鳳来町の山々だと考えられないだろうか」と提言したのは、異能の「古事記」研究者・ペンネーム山田久延彦氏である。

山田久延彦氏は、「真説古事記IV・徳間書店(1984) 発刊」の中で、徐福伝説について述べ、首題の提言をされていた。

その論理の展開は、「仮説論理学」によっており、「高天原は宇宙船である」という設定などから、導かれた説で、一寸追従するのが難しい所がある。しかし、私は素晴らしい直感に満ちた提言をされていると思う。

それ以外にも、出雲は東海地方にあったという説も出されており、筆者の提言している「記紀の出雲・三遠地方説」と共鳴するところがある。

つまり、徐福の求めた東海の蓬莱山は、愛知県の鳳来町にある山々だということである。し

かし、徐福自身は、富士山に辿り着いたあと、鳳来町まで来たと言われた例を、筆者は知らない。

この説を筆者に紹介してくれたのは、愛知県農地林務部に務める公務員の方で、母方が豊橋出身のため、この地方の不思議な伝承を聞き知っていたのだろうか。彼の大学（東大）の先輩である山田久延彦氏の説に共鳴し、東三河の名所発掘を目的にピラミッドを対象とした余暇研究を平成元年から約5年、続けておられたそうである。

山田久延彦氏は、また、日本の古代文明の存在したことについて、アカデミズム学会と異なる意見をもっている。

「現代の歴史学者は、文明は中国から日本に伝来したという考えに執着しすぎているのではないか。そのために、古代の日本に高度な文化が存在したことに思いも及ばない。

しかし、中国の道教においては、高度な文明が日本に存在し、それが中国に伝えられたといっているのである。

一方、徐福の撰録したといわれる宮下文書の歴代天皇記の中に、第15代”天之神農氏神・諱農作比古”天皇がいる。この農作比古神は、天竺真郡（あまつくにまぐり）の州から天降って、須弥の蓬莱国を統治したと記されている。すなわち、徐福の探し求めた東海の蓬莱とは、須弥の蓬莱のことだったのである。」という。

#### 4. 富士古文献の高天原を東三河の地に比定

富士古文献に記されている高天原の存在した阿祖谷のことであるが、古代の名称は、音で考えるべきで、漢字は単なる当て字であることを考慮しなければならないであろう。

「あそ」は、阿祖や浅間とか阿蘇とか記されることがあるが、「阿蘇」は、噴火口を意味すると解釈されている。これは超古代「カタカムナ」文明をとく檜崎皐月氏の解釈するところでもある。

九州の阿蘇山も巨大な噴火口である。しかし、「あそ」が噴火口を意味するのであれば、あそ谷は、火山に関係した地の谷として解釈できる。富士山の麓の谷々もあそ谷と呼んで差し支えないであろうが、日本の各地にある火山の麓の谷々もあそ谷と呼んで全く差し支えない訳である。

このような見方をする場合、愛知県鳳来寺周辺の谷々もあそ谷と呼ぶことは、全く不合理なことではない。というのは、鳳来寺山は、設楽火山の南主峰であり、煙岩山とも呼ばれた。また、三河国総国風土記には、その東南の谷「宇連川＝三輪川」には軽石が流れたという記述もあり、油谷温泉という温泉もある。すなわち、設楽火山群は、1600万年前の火山地帯とされているが、実情は、紀元後かなりの時代まで、どこかで熱水噴火を繰り返す、火山地帯だったと考えられる。

宇連川の下流の豊川中流には、麻生田（あそうだ）という地名もあり、作手から鳳来町に流れる巴川流域には「麻生島（あそうじま）」というところもある。「あそ」の地の名残を残している。

この地方の地名で、門谷（かどや）があるが、この地は、鳳来寺山主峰の南麓を指しており、蓬莱寺の寺院群の存在したところであるが、この地こそ地形からみて「あそ谷」と称するに相応しいところであろう。

この門谷には上浦、中浦、下浦など、湖畔の浦に関する地名があり、古代のいつかの時代に

は、ここに「みず海」があったものと推察される。その北西の地には、杉風呂、森脇などの地名が残っている。この地名の意味するところは、すぎ室、むろ脇であると考えられるのである。しかも、その南辺に宮下という地名があり、そこに子守神社という名の神社がある。この子守神社は、小室神社がなまったものと考えられ、その御祭神が「国狭槌神」であることは、特に意義がある。すなわち、宮下文書に、天竺真郡国から里帰りした「国狭槌神」は、阿祖谷の小室に居を整えたと書かれているからである。しかも、その地は門谷の宮下の地とは、不思議な共鳴である。

なお、子守が小森と同様、小室を意味するということは、出雲の地の小森の由来でも述べられており、筆者の独断ではない。

\*参考 東三河の新城市は、鳳来寺山の南麓に位置し、出沢、浅谷などの大字があり、そこに、宮下という地名が在って、宮下川が流れている。藤沢の地名と藤原姓がある。

また、福田と言う地名があり、徐福の関連を彷彿させる。

ところで、鳳来寺山が不二山であるとの直接的な証拠はないものかと、調査を進めていたところ、2つの有力な関連情報が得られた。

一つは、鳳来町三河大野の地に、瑞穂稲荷「不二庵跡」を発見したことだ。いま一つは、鳳来寺山南西を流れる寒狭川（豊川）流域に「布里」という村があり、その上流には、縄文時代の西向遺跡があり、更に、その付近の地名に「古社」「高宗」というところを発見したことである。

さらに、この地の宇連川右岸には、東三河富士機工(株)がある。

それだけでなく、この三河大野には、不思議な地名、社寺、遺跡、地形が残っている。

## 1) 琴森

古代中国の地誌書「山海経」で東経大荒外の章に、夏の舜帝が大荒で楽器を忘れたことを記しており、その楽器は琴と思われることだ。その大荒が鳳来町を表しているようなのだ。また、忠哀天皇と神功皇后が筑紫に遠征していたとき、神功皇后が神がかって、新羅を攻めるよう神託があったのは、仲哀天皇が琴をひいていたときのことであった。つまり、琴という楽器が呪力をもつと考えられていた。そして、スサノオ命が大己貴命に、伝授した三種の神宝の一つに、天詔琴（あめののりごと）がある。

琴森は、神社の名前にも付けられていて、鳳来町立東陽小学校の南山中腹に「琴森稲荷神社」がまつられている。琴森は、「このもり」と呼ばれており、「湖の守り」「こもり」「こむろ」に通ずるように思われる。なお、東陽小学校の「東陽」も宮下文書に出てくる原初の人類が分かれ住んだ「東陽」の地を暗示するようで、興味深い。

## 2) 大野神社の由来

大野神社の創立は、古昔となっていて、不詳である。御祭神は建速須佐之男命で、扶桑国三州八名郡大野村総社大明神ともいわれる。また、近隣五県の産土神とも、大野、井代、細川、貝津、下平の産土神・総社明神ともいわれる。

境内社には、服部神社があり、その御祭神はアメノタナバタ姫である。これは、少し下流にある赤引郷から移設合祀されたものといわれる。赤引の絹織物は、その品質の良さが抜群で、太一御用の幟旗を立てて、伊勢の天照大神に献上され「皇室行事で用いられるニギタエ」となるものである。

とすると、アメノタナバタ姫は、天照大神とともに機織りを行っていた織姫・若日女ではな

かろうか。スサノオ命は、ウケイで勝ちさびて乱暴狼藉を働き、機屋の屋根を壊し、逆はぎした斑駒の皮を投げ込み、驚いた若日女は織機のヒでホトを突いてみまかった。

そこで、天照大神は、天之岩戸に隠れられ、高天原も葦原中津国も暗闇になってしまったという「古事記」に書かれた神話の舞台が、ここにあったという感触が得られるのである。

なお、スサノオ命がこのとき作っていた田の名前を、口樋田（くちとだ）と日本書記の一書に書かれているが、樋田とか樋野という地名が下流の新城市日吉等に残っている。

### 3) 天橋

大野から赤引温泉に下る県道が、阿寺川を越えるところに、橋がかかっている。この橋の名前は、驚くべきことに「天橋（あまはし）」であった。まさに天竺（あまつくに）の橋を表している。阿の名をもつ地の高天原の一拠点であったのであろう。

出口王仁三郎の著書「霊界物語」の高天原は天教山（つまり日本の中央にあったという古代巨大富士山）に架かる橋の名前を天橋と呼んでいることから、鳳来町大野の天橋はこのことを表しているのかも知れない。

### 4) 古い家系

大野の旧家は65代続いた大橋家である。大橋という名も天橋を表しているように思われる。

徐福の関連で考えると、中国の徐福直系で現在64代目という家系があることから、大橋家が長寿家系であれば、徐福時代から続く家系である可能性もなしとしない。

### 5) 大野神社のご祭神は国狭槌神

大野神社で併祭の御祭神には、六所大明神と八王子大権現、天王がある。六所大明神は猿田彦命、天王はスサノオ命と解釈されるが、八王子大権現とは、どのような神なのかわからなかった。

それが、八名郡誌をみると載っていた。能登瀬（大野の上流の地）の諏訪神社の撰社に国狭槌命が祭られ、八王子権現は国狭槌尊のことと記されていた。つまり、宮下文書で述べられた「天竺真郡国」から里帰りした国狭槌尊が八王子権現であるというのだ。

しかし、宮下文書をみる限り、国狭槌尊は一人であるから、当時その後を継いだ八人の王子も国狭槌神と呼ばれたのかもしれない。

国狭槌神は、高天原から東国を治めたと記されているから、高天原の一部と考えられる三河大野に痕跡があることは納得できることである。更に、八王子の内の誰かは、関東まで来て、八王子市の祖神になったのかも知れない。

国狭槌尊の八王子の名前は、トホカミエヒタメ、と称され、祝詞で読み上げられている。そして、その内のカノ神は、ホツマツタエの研究者などからは、古代中国の夏の皇帝になったといわれている。また、トの神は、三河一宮の砥鹿神社の神という説（砥鹿神社誌）もある。

また、安部晴明が保管したと言われる唐の玄宗から入手した「金烏玉兔集」の序に載る牛頭天王と蘇民将来伝説に現れる、南天竺の竜宮姫との間でうまれた子達も八王子と言われている。蘇民将来神社は小坂井の篠東神社の境内社としてあり、伊勢に竜宮があったという伝説もあることから、蘇民将来伝説は、三河高天原の伝承と重なるところがある。

すなわち、牛頭天王は、神農、国狭槌尊と重なるところがあり、それが八王子伝説につながり、日本全国に広がるだけでなく、広くアジアに広がっていったような感触が得られるのである。

いずれにしても、国狭槌尊の痕跡は、鳳来寺山麓および周辺の地に、濃く広く残されていた

のである。

宮下文書では、神農比古と農佐比古が、飛驒を通り、美濃、尾張、三本の川（三河）を越えて、「カキツ」に居住する前に、留まったところは、「スルガ」であり、近くに「大海」があり「カイの国」があったように記されている。

従来の論者の多くは、それを駿河、甲斐、富士五湖と比定し、解釈してきたが、どうも地誌・遺跡と合致しないことが多かった。だが、いまは違う。スルガは新城市の「須長（すなが）」に比定できるし、大海はまさに新城市の「大海（おおみ）や有海」に、「カイの国」は「貝津（かいづ）」に、「カキツ」は「柿津→柿田」に比定でき、その、景観、歴史、風習、伝承すべてが合理性をもって説明できる。これこそ、伝説の不二蓬莱高天原であった。

## 5. 高天原と徐福の痕跡

三河大野が、豊葦原瑞穂の高天原であったとすると、もっと多く、高天原伝説や徐福の痕跡が残っているはずである。鳳来町宇連川周辺を探索すると、宇連川上流には、鳳来湖があり、鳳の島がある。鶴亀伝説の亀淵川が川合に流れ、そこには縄文時代の人の居住遺跡があった。三河川合には、丹野という地名があり、朱（水銀）の産出地があった。

新城市有海から鳳来町の乗本にかけて、盆には放下踊りや「なべづる（つる）」の火送りの行事がある。今少し下流の賀茂町には鶴巻がある。

当地の「ひおんどり」などの、火踊り祭りは、徐福一行が持ち込んだと解釈できる。

富栄と長篠の境には、正福寺川が流れ、鳳寿山・正福寺がある。その一角には、招福稲荷神社があって、蓬莱山弁天島を模した池がある。正福（しょうふく）や招福（しょうふく）は、徐福の中国読みのシューフーに似た発音となる寺社である。事実、小坂井町には徐福上陸の伝承があり、名社「菟足神社」には、「徐福」の人形を飾って「招福」との札を掛けているのを目撃している。招福稲荷は、徐福が稲を持ち込んだ福神として祭る古い神社であったと思われるのである。

赤塚山の麓からは、布目瓦が出土しているが、中国の徐福村の遺跡から、布目板瓦が出土したという。

また、奥三河に徐福の伝承があるとの記述が発見できた。即ち、神奈川県の神社誌（稲葉博著、神奈川県の古寺社縁起—知られざる伝承・霊験譚 S63.4 暁印書館発行）に、三河の奥に徐福伝説があるとの情報が見つかった。

三河遠州には、徐福霊会という会があって、気功の有段者などが会員になっているなどの話も聞いた。

## 6. 徐福のことを記録した古文書の発見

### 1) 尾参郷土史 孝霊天皇の記事

この天皇の七二年に、秦人の徐福が木の国（紀伊）牛間戸に來たり、転じて参河の宝飯郡海辺、御津浜の六本松と稱する所に上陸す。その風景の美、肥沃の地なるを喜び居館を築く。

徐福は秦始皇帝を欺き、玉布、金銀、童男、童女を具し、官位は古座侍郎の高官たれば、三河に來たりても富栄え、我が民族もこれを尊敬し、恵みを蒙ること多く、その随行の童男女、成長して居民となり、秦氏を稱す。これ東参に秦氏の多き所以なり。この民族は長山神社を建

て、天地長久を祈り、その地をコサブと云えり。蓋し徐氏の官名よりの地名となりしならん。これ三河に織物、養蚕等の早くより開けし原因たらん。

後年の事なれども、三河産赤引きの糸をもって、御衣の料に定め織ることとなりしも、糸質の純良なるによりてなり。

徐福の来たりしは、明治三十年を隔てること2115年前なり。

随行の童男女は、悉く三河に居住せしも、移民を隠さんとて、遂に其の家系を失うに至れり。**鵜殿氏**、その他明知せるは数氏（秦氏）あるのみ。

## 2) 牛窪記（抜粋）

著者、年代未詳。牛久保牧野氏を中心とする合戦及び社寺の記録

神宮文庫所蔵。牛久保の熊野神社は、徐福伝説とイザナミ神がもととなっている。

- 1) 「ココニ東海道三河国宝飯郡牛久保之庄者、往昔秦氏 熊野権現ヲ常左府長山之郷ニ勸請ス。崇神天皇御宇ニ、紀州手間戸之湊ヨリ、徐氏古座侍郎舟ヲ浮ベテ、コノ国沖ノ六本松ト云ウ浜ニ来ル。礪山続キ、前ハ晴、後者深シ。得一種産百物地ナリトテ、御館ヲ築キ給フ。民屋之族 尊敬シテ恵ミ蒙ラシムルコト甚多シ。徐氏者秦国ノ姓、コノ子孫以秦為氏。長山之神者 常天地久キ護リ給フ。故ニ庄ノ名モ常左府トイエリ。」

- 2) 故説事 熊野三所大権現之事

家秘ノ旧記ニ 「伊ザナミノ尊 火ノ神ヲ産ミ給ヒテ カン去リ給フトアレバ、是熊野山ノ本主也。」

- 3) 証誠殿相伝ノ事ニ付テ 密義有り

「一座者 秦国徐氏之靈也。東海扶桑国者神仙ノ嗣系、蓬萊郡彙ノ宮城也ト聞キテ、葉求メン為ニ 艤スルト偽ッテ、ヒソカニ聖典百家ノ書、種々ノ財ヲ数船ニツンデ徐氏一族 併蘭姿伶節ノ童男兒女五百人ヲ乗セ、勅ニヨツテ海ヲ渡ル トイヒテ我ガ日本ニ来ル。徐市ハ 不尽山ニメデ、駿州ニ到リ、徐明ハ 金峯山ニ入ル。

徐林ハ 肥前金立山ニ住シ、

徐福ハ 着岸ノ津 紀州古座ニ止リ 後熊野山ニ入ル。

徐福ガ孫 古座侍郎 三州ニ移リ来ル故ニ、本宮山下秦氏之者多シ。

3) 牛窪密談記（うしくぼみつだんき）は、牛窪記を中神善九郎行忠（生年不詳 - 1711 年）が加筆訂正した東三河郷土史料。1701年（元禄14年）成立。牛久保の沿革、牧野氏の事跡などを収録。巻末に山本勘助の伝記が記載。「牛久保密談記」と表記がされている場合もある。豊橋市中央図書館所蔵。「牛窪記」と「牛窪密談記」では記述の異なる場所があり、それが加筆および訂正部分である。

牧野家先祖とする牧野古白が明応2年（1493年）長山一色城に入城した際、その道すがら牛頭天王社の金色清水の窪溜まり付近に道を塞いで寝牛がおり、人々の通行を妨げていたが、古白が来ると牛は起きあがり道を空けたので、牛頭天王の加護がある瑞祥として、地名を一色トコサブ（常荒）から牛窪と改めたという伝説が本文前段で紹介されている。

以上